

太祇等三吟歌仙「妾」の巻評釈

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 真弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4669

太祇等三吟歌仙「妾」の巻評釈

はじめに

炭太祇は、江戸の慶紀逸の下で俳諧を学んだ後、宝暦元年（一七五一）京に向かい、翌年九州長崎に旅し、帰洛して禪門に入って大徳寺真珠庵に身を寄せ、翌三年には島原の不夜庵に居を定めたと伝えられている。その後太祇は蕪村に親しみ、しばしば蕪村亭で催された月並俳諧の会に出座していたらしく、蕪村は角屋の主人徳野へ自亭の俳席に誘う手紙を送り、「むかしは不夜之諸君も、愚亭会へは毎度御出坐之有^{これ}り候。」（天明三年四月廿一日付）と認めている。蕪村は、太祇が明和八年（一七七二）六十三歳で没した翌年、嘯山・雅因と協力し、『太祇句選』を編纂して跋文を添え、一周忌の靈前に供えている。蕪村の跋文は太祇の俳諧活動を讃えるものであり、二人の親交の深さを窺わせる。しかし蕪村の評価を得ていた太祇の俳諧作品は、今日ほとんど評釈されていない。よって太祇が不夜庵に嘯山・随古を迎えて興行した三吟歌仙「妾」の巻（『平安二十歌仙』所収）について私解を試みてみようと思う。

石 川 真 弘

「妾」の巻（明和四丁亥年四月廿四興行）
 発句 妾人にくれし夜はとゞぎす
 季語は、「ほととぎす」で夏である。「妾」はオモヒモノと訓み、

太 祇

恋人、愛人の意で、主に男性から女性を指して言う言葉だが、近世期には女性が男に対しても用いていた。当発句は、男の心境を詠み、『毛吹草』（重頼編、正保二年）の「俳諧恋之詞」の項には「思ひもの」とあり、恋の句である。「ほととぎす」は、冥土の鳥・田長鳥など多くの異名で呼ばれているが、『俳諧類船集』（梅盛編、延宝四年）には「恋し鳥」と見え、発句は恋しい気持ちに駆り立てられる意を表す。久しく睦まじい関係にあった女性をよその男に取られてしまい、それならもう呉れてやるよと思ひ切った積りでいたが、夜になってほととぎすの鳴き声を聞くと、諦めたはずのその女性への思いがよみがえって来て、切ない気持と、諦めたはずのその女性への思いがよみがえって来て、切ない気持が募るばかりだという意で

ある。つまり一度は思い切った恋だが、ほととぎすの鳴き声で再び恋しい気持が募ってきたという未練の心境を詠む。

妾人にくれし夜ほととぎす

脇句 月の枕も天鷲絨の苔

随古

季語は、「天鷲絨の苔」を夏の季語「青苔・苔青し」のことと解し、夏の句に扱う。「月の枕」は、月の光が差し込む部屋の窓辺で添い寝に用いた枕の意で、「月」に季語の役割はない。ただし初折表五句日の定座の月を三句引き上げた月と見る。「天鷲絨」は、太夫職の遊女が用いたビロウドで仕立てた上等な夜具である（『色道大鏡』巻第三寛文式上）。「月の枕も」の「も」は、これもあれも、何もかもこの意の助詞である。付合は、次のような意であろう。愛人をよその男に奪われて、今更弱音を吐くことは負け犬の遠吠えと同じ、それならそんな女など呉れてやるよ、と言ったもののその夜ほととぎすの声を聞くと急に恋しい思いに駆り立てられた。男は未練の気持にさいなまれ、終には妬けになり、女も、月の光を受けて添い寝した枕も、愛を確かめたあの苔色の天鷲絨の夜具も、何もかも呉れてやる、と投げ遣りになった。天鷲絨の夜具は、恐らく男の遊女への贈答品であったろう。

月の枕も天鷲絨の苔

初オ三 土橋に柴の欄干ゆひなして

嘯山

季語はなく、雑の句である。「土橋」は、広くドバシと言われているが、当句はツチハシと訓む。付句は、木を組み上げて作った橋の上に土を乗せて固め、さらに柴を結びつけて欄干を作りなした粗

末な簡素な橋の意である。前句を瀟洒な数寄屋造りの建物、また苔を敷き詰めた住び寂好みに作り成した庭と見ての付けであろう。秋には月の光が部屋の中にまで差し込み、体を横たえて月を眺めることができるような数寄屋風の家を建て、庭には月の光で天鷲絨のように見える苔を敷き詰め、家の前を流れる小川には土橋を掛けて、その橋には柴を結びなした欄干を付けるといった凝りようである。その場所はよく漢画に見られる人里離れた幽谷のような所で、その家の主は、瀟洒な住まいを好み、風流を楽しむことを生甲斐にしているような人であろう。

土橋に柴の欄干ゆひなして

初オ四 およそ三とせの糧運ぶ也

太祇

季語はなく、雑の句である。「糧」は、カテと訓む。「三とせの糧」は、三年間は耐え忍ぶことができる食糧の意で、『莊子』逍遙遊編の「千里ニ適ク者ハ、三月糧ヲ聚ム」の文を籠居する意に転用した表現であろう。ただし「およそ三とせの糧」を文字通り三年間の生活が耐えられる食糧と解する必要はなく、大変な量の食糧という程度の意に解しておきたい。前句から俗世間との交渉を断ち、山間に庵を設けて生活する人を想起した付けであろう。武士の籠城の場面とも考えられなくはないが、もしそうだとすれば「柴の欄干ゆひなして」が不自然である。籠城のために食糧を運び込むのに土橋を設けるだけならまだしも、わざわざその橋に柴で欄干を結い出す必要はない。やはり世間と交渉を断ち、山間に庵を設け、自分だけが通れるだけの粗末な橋を架け、かなり長期に亘り生活できるだけの食

糧を運び込んだと解すべきであろう。つまり打越しの瀟洒な住まいを樂しむ趣味人に対し、俗世間との交渉を断つて籠居する人物を趣向した付けである。

およそ三とせの糧運ぶ也

初オ五 雪ながら籠を預る市の中

随古

季語は「雪」で、冬である。およそ三年分の食糧が入るかと思われる大きな籠を背負い、雪の降りしきる山間の村から町中へやって来て、知り合いの家に雪を被ったままの籠を預けるやいなや、日々の食糧を買いに店に走ったという付けであろう。恐らく山は大変な大雪で自分の家の食料だけでなく、近所の人たちからも頼まれたたであろう。山間の村の人たちの助け合う人情味豊かな生活が忍ばれる。「雪ながら」という表現は、村が大雪である様子と急いで店に食糧を買いに走る村人の姿が想像される。前句は、大変な量の食糧を買い入れることを窺わせるとともに、村人たちが厳しい冬の生活を互いの助け合いで耐え忍ぶ、人情豊かな村里の暮らし振りを思わせる。

雪ながら籠を預る市の中

初オ六 よろこぶ犬の尾にて挨拶

嘘山

季語はなく、雑の句である。付句は、前句から村里の人が野菜を籠に入れて町中の知り合いの家に届けた場面を趣向する。ところがその家の人はあいにく留守で、犬だけがいてしきりに尾を振って挨拶する。村人はこの家の人と親しく、しばしば野菜などを届けに訪れていたであろう。犬もその村人に慣れていて、盛んに尾を振っ

て喜び迎える。「犬の尾にて挨拶」は、村人とその家の人たちとの気の置けない間柄を窺わせる。恐らく村人は、雪を被ったままの野菜を入れた籠を、家の軒先に置き、帰って行ったのであろう。「籠を預る」は、人に預けるという意で、俳意を込めた面白い表現である。当時の庶民の人情溢れる生活の様子が忍ばれる心地よい作品である。

よろこぶ犬の尾にて挨拶

初ウ一 そよぐと闇に嵐の吹のこり

太 祇

季語はなく、雑の句である。前句を激しい嵐が過ぎ去った後の犬の様子と見る。昼の間は強烈な嵐が吹き荒れ、人々は家の中に身を潜めて嵐の過ぎるのを待った。夜になって漸く嵐はおさまり、あまりにもひどい嵐であったので外の様子が気になり、表に出てみると闇の中に静かにそよぐ風が吹き渡っていた。すると突然尾を振りながら挨拶するように犬が寄って来た。いつもは町中を歩き回っていて、出会っても素知らぬ顔をしている犬である。がその犬が近づいてきて尾を振って挨拶する。犬も激しい嵐に怯えていたのであろう。「そよぐと」は、風が静かに心地よく吹く様子を言い、「春風がそよぐと吹く」と表現することばだが、当句において犬や人のホットした安らぎを表す。付句は、昼中吹き荒れた強烈な嵐が、夜になって静まり、人も犬も安心した様子を窺わせる。暫く続いた人事の句を避け、場面の転換を計った景気の句である。

そよぐと闇に嵐の吹のこり

初ウ二 咳気の声も親に其まゝ

随古

季語はなく、雑の句である。吹き荒れた嵐も夜になって治まり、吹き残ったそよぐ程度の風の音が闇の中に聞こえてくる。すると突然隣の家から激しく咳込む声が聞こえてきた。その声は、父親の声にそっくりである。父親はすでに他界し、今は息子が家を取り仕切っている。その息子の仕草は実によく親に似ており、咳払いまでもが父親そっくりであり、生前の隣の父親のことが懐かしく思われたのである。「咳気の声も」の「も」は、父親の仕草ばかりでなく、「咳払いまでもが」の意である。ただし付句は、単にそうした状況のみを詠んだのではなく、隣人同士の暖かい関係、日頃の何かにつけて助け合いながら暮らして行く生活の様子が忍ばれる。嵐が治まって少し安きを覚えた隣人同士の気遣いを窺わせる好句である。

咳気の声も親に其まゝ

初ウ三 透写し罪深からぬ御下手にて

嘯山

季語はなく、雑の句である。「透写し」は、中七文字の「罪深からぬ」や下五文字の「下手」の文字に御を付していることにより写経のことと解してよいであろう。前句から親孝行の息子が、今は亡き父親の供養のために写経をする場面を発想した付けである。父に似て実直律儀な息子で、何もかも親ゆずり、親同様信仰心も深く、親の供養のために写経を試みるが、写経中に出た咳払いまでも実に良く似ている。その文字までが親にそっくりで誠に下手である。そのため臨摸ではなく、経本の上に紙を直接置き、透き写しで写経するのだが、親の供養のための仏心からの行いであり、その透き写しの行為は罪深いものではない。恐らく透写した文字もまた下手なの

であろう。文字が下手故、仏は透き写しの写経を許すという趣向の俳諧である。

透写し罪深からぬ御下手にて

初ウ四 局の道に踏まじき品

太 祇

季語はなく、雑の句である。「局」はツボネと訓む。近世期、遊郭で下級女郎の居る部屋を局といったが、付句の局は後宮などで女御・女房などの居所の意であろう。前句の「御下手にて」という表現から、王朝期の殿舎などの局の生活を想起した付けと見る。「品」は、品格・品性の意である。局に勤める女官として身に付けて置かなければならない品格・品性と言うものがあり、その一つに書の道がある。局としての心得を踏み外すことは許されないのである。書の練習には臨摸が大切なのだが、殊に下手な者には透き写しによる練習は罪にはならず許されたとの句作りである。暫く続いた庶民の生活の様子を転換し、王朝期の事柄に時代を移した付けである。明和安永期の連句には、王朝期の物語から題材を得た作品がしばしば見られる。

局の道に踏まじき品

初ウ五 言ハさじと口を押へる最眞ぶり

随古

季語はなく、雑の句である。「口を押へる」は、ものを言わせまいとする意である。「最眞」は、自分の氣に入った者に目を掛け力を添えて助けること、「ぶり」は振り、挙動に現れた人の様子を言う。「口を押へる最眞ぶり」とは、人の悪い噂を止めようと、逆にその人の良い面について話をして最眞振りを見せたという意である。

局の部屋は女性ばかりで、評判、噂話などで兎角口煩いものである。王朝期の物語には、しばしばそうした様子が描かれている。局としてやっつてはならないことの弁えは、迂闊に人の悪口や噂話をしてはならないことである。それが局に身を置く人としての品位品格である。ところがそうは言うものの良くない人の噂をする人がおり、その噂を押さえようとその人の良い面を話題にして、その人への鼂眞振りを見せている。局における女性のみの独特の世界、その複雑な人間関係を詠み添えた付句である。

言ハさじと口を押へる鼂眞ぶり

初ウ六 あれが牽牛これが織姫

嘯山

季語は、「牽牛、織姫」で秋であり、その星の名は恋の言葉で、恋の句である。前句から互いに恋心を寄せている男女が、七夕の夜空を眺めている場面を発想した付句であろう。前句の「言ハさじと口を押へる」を突然女への思いを言おうとする男の言葉を遮る女の仕草と解し、「鼂眞ぶり」は、女の男への恋心を寄せている素振り、即ち女の男を慕っている心の動き、振る舞いと見て趣向した付句である。付句は、今の自分達の互いの心境を牽牛織姫に託して言った女の言葉であろう。牽牛と織姫が逢瀬を楽しむ話まではせず、それとなく「あれが牽牛これが織姫」と言い、二つの星の逢引の様子を暗示させ、今の二人の互いに恋い慕う気持ちをその言葉に含めた表現である。女は男の告白がなくても男の気持を察しており、自分の思いを男に解って欲しいという男女の微妙な恋心の遣り取りを詠んで、見事な演出の付句である。

初ウ七 あれは牽牛これが織姫
家数にはこる城下の月夜さし

太 祇

季語は「月夜」で、秋である。初裏八句目の出所の月を一句引き上げる。「月夜さし」は、「月夜差し」と書き、明るい月が差している様子を言う。『猿蓑』所収歌仙「市中は」の巻に、「てんじやうまもりいつか色づく 去来／こそ／と草鞋を作る月夜さし 凡兆」の用例が見られる。豊かな城下町に住む中年の夫婦が、七夕の夜、美しい月の光に誘われて町中を逍遥し、高台に来て佇み、町の家数の多さを眺め、この城下に共に住んだことを誇りに思う。妻は言う、「苦勞もあつたけれど幸せね」。夫は少し照れて妻の言葉を反らすように星空に目を遣り、「あれが牽牛で、これが織姫だなあ」と言葉返す。二人は月の光が美しく映し出した夜景を楽しみ、自分達がこの城下に住んだことを誇りに思いながら過ごして来た日々の思いに耽り、しみじみと夜景を眺める。「家数にはこる城下」は、城下町の豊かさのみならず、取り立てて言うほどの採め事もなく過ごしてきた夫婦の幸せな日々を思わせる表現である。

家数にはこる城下の月夜さし

初ウ八 秋は下鰯の山をつくぐ

随 古

季語は、「秋」である。下鰯は「ホシカ」と訓み、鰯の干したもので、農村で肥料に使う。「つくぐ」は、じっと思いをこらすさまを言い、下に「眺める」の語を省略した表現である。秋は稔り収穫の季節であり、来年に向かって肥料を準備する季節でもある。前句の好天が続く秋の夜の月に照らし出された豊かな城下町の様子が

ら、その周辺の豊穡が期待される農村の景を付ける。前句は、遠景、付句は近景であろう。出来秋の季節、好天が続き、輝くような月の光に照らし出された豊かな家並みの続く城下町が遠くに眺められ、その城下町を取り巻く農村地帯の畑には来年の肥料の干鰯が、早くも山のように積まれ用意されている。農夫はこの秋の好天続きに収穫が多かったことを喜び、この分だと来年の収穫も期待できそうだとつくづくと干鰯の山を眺めるのであった。

秋は干鰯の山をつくぐ

初ウ九 しら波のよする渚なみさきによい男

嘯 山

季語はなく、雑の句である。「しら波のよする渚に」は、『和漢朗詠集』の「遊女」の項に「海人詠」として収められる「白浪のよするなぎさによをす海人の子なればやどもさだめず」の歌からの援用であろう。この歌は、『新古今和歌集』にも「題しらず 読人不知」として採録されている。付句は、広く知られた歌の上二句に俗語「よい男」を配した俳諧的表現趣向である。「しら浪のよする渚に」は、白波が打ち寄せる渚に身を任せて生活するの意、「よい男」は、いかにも海の男漁師らしい頑強そうな体付きの男を言う。

夏前から鰯を捕り、それを干鰯に仕込み、秋には肥料として農村地帯に送るために海辺近くの一カ所に山積みにしたのであろう。立派な体格の漁師は、その山積みの干鰯の山を見てよくぞこれほどの鰯を捕ったものだといつゝ眺めているのである。春先から鰯漁に掛かり、秋には干鰯に完成させる漁師の生涯、秋の景を眺めて侘びしさに浸る和歌伝統の雅の世界ではなく、漁師のなりわい、心情を詠

んだ付句である。

初ウ十 しら波のよする渚によい男
引裂ひきさきもてる物のあふ縁えん

太 祇

季語はなく、雑の句である。前句の「しら波の」は、「よる」などにかかる枕詞で、寄る、出会うと連想し、別れ別れになった者が偶然にも出会うことが出来た場面を趣向した付けである。「よい男」を品の良い男と解する。白波が打ち寄せてくる海辺に、田舎では見掛けないような品の良い男が佇んでいる。その男が長年探していた男のように思われ、声を掛け、事情を話してみると、その男は自分の持っている物と同じような物を懐から出してきた。それは、正に一つの物を引き裂いた私を持っているもう一方の物であり、自分が探していた人物であった。幼い時に分かれ、成長してから偶然巡り会うことができた話は、芝居などによく仕組まれ、付句はそうした場面、前句の芝居めいた内容を更に展開させた好句である。

引裂もてる物のあふ縁

初ウ十一 花の暮飛鳥あすか井殿いどのは松計はかり

随 古

季語は「花」で、春である。「花」は、定座の花である。前句のやむなく別れ別れになった人物がふとしたことで偶然巡り会うことが出来たという内容から、そうした場面を仕組んだ物語『狭衣物語』に想いを得た付けであろう。数奇な運命を辿る飛鳥井君が登場する『狭衣物語』は、江戸期には御伽草子『狭衣』に改作され、当時の人々に広く親しまれた。事情あって別れ別れになった飛鳥井姫が後に慕う人に巡り会うことが出来たという話に縁りのある飛鳥井家は、

和歌・蹴鞠の師範の家である。花も終わりの季節、飛鳥井殿では蹴鞠を行うべく蹴鞠の庭が整えられているが、他家の蹴鞠の庭が松・竹・楓・柳を用いるのと異なり、神の依代と言われる松ばかりが四周の隅に立てられている。松のみを四隅に立てて蹴鞠を行うというのも、飛鳥井姫が引き裂かれた人と巡り合うことが出来たことを神に謝す意からであろうか。

花の暮飛鳥井殿は松計

初ウ十一 いとのんどりと末鳥^{まだ}の声

嘯山

季語は、「のんどり」で春である。「のんどり」は、のどかな、のんびりの意である。「末」はマダと訓み、花の盛りを過ぎててもまだの意である。付句は、前句の花が殆ど散って辺りには花が見られない季節となったという意の「花の暮」を受け、それでもなお鳥たちが花に想いを寄せてまだのんびりと鳴いていると趣向し、前句の蹴鞠の庭の様子に辺りの長閑な鳥の鳴き声を詠み添えた。花はすっかり散った季節、飛鳥井殿では四隅に松ばかりを立て廻らしてのんびりと蹴鞠を催している。小鳥たちは、散りゆく花を惜しむと言うより、のどかな気配を漂わせる蹴鞠の様子に合わせるように、楽しそうに辺りに鳴き声を響かせ、蹴鞠の催しを盛り立てる。古雅な趣の蹴鞠の様子にのどかな鳥の鳴き声を添えて、暮春の頃の長閑な景を捉えた句である。

いとのんどりと末鳥の声

名オ一 春霞^{はるがき}煙^{けむり}しるしにたつ煙

太 祇

季語は「春霞」で、春である。「煙」をケムルと動詞に訓む。前

句の「末鳥の声」を夕暮れ時分の鳥の声、日が暮れかかっているのにまだ鳥が鳴いていると解す。「しるしに」は、前兆に、その兆しにの意で、「春霞煙しるし」は、春霞が立ちかけた春浅い時分を表す。付句は、農村地帯に転じた景であろう。下五文字「たつ煙」は、春になって農作業を始め、野焼きまたは田畑で刈り取った雑草や藁などを燃やす煙であろう。春の夕暮れ時分、辺りは暗くなりかけた頃、あちこちの田畑で雑草や藁などを焼く煙が立ち上り、春霞がかかる兆しを見せており、夕暮れ迫るのに鳥たちはまだ囀に帰ろうとせず、春の夕暮れを楽しむかのようにのんびりとした声を辺りに響かせている。そのような春の穏やかな景を詠む。単純な表現ながら「煙」の文字を二字読み込んで句のリズムを調べ、前句の「のんどり」を受けて、春の長閑な田園風景を捉えた句作りは巧みである。

春霞煙しるしにたつ煙

名オ一 菜種^{なな}の船が又二艘^{ふたふね}着^つ

嘯山

季語はなく、雑の句である。前句の田野の景を、昨年採れた菜種を運ぶ船が次々とやって来る春の港の景に転じた付句である。「又二艘」は、船が次々と到着する港の賑わいを表す。前句の煙は、港に出這入りする船の航行に支障のないように煙を立て、相手に自分の船の位置を知らせるためのものである。「淡路島しるしのけぶり見せわびて霞をいとふ春のふな人」(前内大臣源通光、『新勅撰集』)という歌が知られ、『藻塩草』巻一には「しるしの煙 是は、すまと淡路とにかよふ船には、とふ火をたつる也。それを見て、たがひに舟をかよはずなり。是をしるしの煙と云也。むかしの事也と云々。」

と見え、航行中船同士が支障のないように互いに煙を焚いて位置を知らせたのである。菜種は、江戸時代油に搾り、灯火用、食用、結髪用などの需要が多く、盛んに栽培された。港は大変な賑わいで、菜種を種んだ船が次々と入って来る。それぞれの船は衝突を避けるため、船の位置を互いに知らせる煙を立ち上らせ、その煙はまるで春霞が立ち込める兆しを思わせる。

菜種の船が又「一艘着く

名オ三 追がらし果は子を取馬やらん

随 古

季語はなく、雑の句である。「追がらし」は、「追枯し」と書き、役に立たなくなるまで、酷使することを言う。「やらん」は、不確実な推測を表す連語で、何々だろうかの意である。つまり付句は、馬が働くことができる間は追い立てて使い、働けなくなったら仔馬を取る種馬にするのであろうかという意である。前句の「又」一艘着くから大変な量の菜種が船で次々と港に運ばれて来た場面を想定し、その菜種を陸路で運ぶ馬の苦勞を思い遣った付句である。港には次々と菜種が陸揚げされ、大変な量の菜種が積み上げられている。その菜種は陸路を運ぶ荷馬車に積み込まれ、馬は馬子の鞭に追い立てられて力強く進み出す。馬の一生も大変なもの、あのように追い立てられて仕事に励み、働けなくなれば次は子を取る種馬となって生涯を終わるのであろうか。前句の港の賑わいから、その一役を担う働きづめの馬の一生に転じた付けである。

追がらし果は子を取馬やらん

名オ四 国に余れる野のぶきみなる

太 祇

季語はなく、雑の句である。「国に余れる野」は、国にとつては余分な土地、国は何の効用もないため放棄した土地、国の政權支配が及ばない荒れた原野の意である。付句の下七文字の「野のぶきみなる」は、全く人の手が加えられず気味が悪いほど荒れ放題になった土地を思わせる。その荒れ果てて不気味さが漂う地が、馬の力を借りて整地されようとしている。あまりの荒れようで整地の作業は厳しい。馬は取り付けられた鋤を追い立てられて引くが、思うように鋤は動かず作業は容易ではない。馬は、更に追い立てられる。働くことが出来る間は人に追い立てられて働き、老いて力がなくなれば子を残すための種馬として働かされるのであろう。不気味なまでに荒れ果てた地はやがて整地されて人の役に立つてあろうが、人に生涯を捧げる馬が一層哀れに思われる。

国に余れる野のぶきみなる

名オ五 似せ者の皇女兔や角かしづきて

嘯 山

季語はなく、雑の句である。この付句は、鳥羽上皇の御所に化女が現れ、博識をもって玉藻の前と称されて上皇に寵愛されたが、化女は狐の妖怪の化現と見破られ、狐は那須野に逃げたがその地で射殺されたという御伽草子『玉藻の草子』の話に依る句作りであろう。この話は謡曲『殺生石』に基づき、当時広く知られていた。「似せ者の皇女」の「似せ者」は、狐などの異類が人に姿を変えて現れたこと、「皇女」は、天子の姫宮を言う。「兔や角」は、なんのかのと、あれやこれやと、「かしづきて」は、下々の者が丁重に心を込めてお世話をするの意である。付句は、前句の「国に余れる」から、国

を治めている武士の支配が及ばない宮中を発想した付けであろう。宮中には武士たちの支配が及ばず、庭内は荒野と化して不気味な雰囲気包まれているのである。帝の寵愛を受けている皇女は怪しげなまでに美しく、侍女たちは皇女がただ者でないと知りつつも大切にしてお仕え申し上げているのである。

似せ者の皇女兎や角かしづきて

名オ六 朝逢ぬ日はうとき心根

随古

季語はなく、雑の句である。「心根」は、心の根本にある心情を言う。「うとき心根」は、相手との交わりが深くない、他人行儀、心底親しめないの意である。付句は、前句の「似せ者の皇女」を表面は皇女らしく振る舞うものの品格に欠けるところのある人物と解し、かしく女官たちの真から親しめない心境を付けたのであろう。女官たちは皇女にあれこれと心を尽くしてお仕え申しているが、皇女は女官たちへの気遣いも皇女としての弁えもなく、心底尊敬出来る皇女ではないのである。皇女は、毎朝決まった時間に女官たちの前に姿を見せて女官たちの挨拶を受けるべきであるのに、その勤めもしばしば怠る。そのような日には女官たちは、皇女に対して他人行儀になり、親しみ尊敬の心などとも持てず、なんとも疎ましい気持ちになってしまふのである。

朝逢ぬ日はうとき心根

名オ七 百人が一所に伊勢へ詣る也

太 祇

季語は「伊勢へ詣る」即ち「伊勢参り」で、春である。近世期には「お蔭参り」「抜け参り」とも言われ、伊勢神宮への集団的な巡

礼運動が起こり、明和期には年間約二百万人、幕末には約五百万人に達したと言う。「百人」は、百人の意ではなく、大勢の人と云うことである。「一所」は一緒と同じ意である。当時百人前後の集団で旅をすることと言えば、伊勢参り以外には殆どなかったものと思われる。大勢の人たちが一緒に旅に出て行動する場合、朝に顔を合わせて挨拶を交わした人とは親近感を覚え、自ずと道中親しくなるけれど、そうでない人とは、一日中心が解け合わないものである。大勢でお伊勢参りに出かけ、朝に宿で顔を合わせて挨拶を交わした人とは、其日 日打ち解けて話をしたりするが、大勢なので挨拶を交わさずじまいの人もあり、そのような人とは疎遠な気持ちになることだの意であらう。

百人が一所に伊勢へ詣る也

名オ八 海のみどりも樹々の緑も

嘯山

季語は「緑」で、春である。海を紺碧の海、また碧海と言い、碧をみどりとも訓む。「海のみどり」と言う表現は、「うみのみどりもたゞ春の色 紹水」(美濃千句第八)など連歌にしばしば詠まれている。付句は、海の緑と木々の緑はその色合いが少し違うが、みどりと言う点では同じだの意であらう。前句を、人百人の人生は一人一人違うが、百人前後の人たちがお伊勢参りに出かける時、それほど多くの人数でも参詣して幸せを願う気持ちは皆同じであると解しての付けである。人は百人それぞれ性格、物の考え方に違いがあるが、大勢でお伊勢参りをして祈る心は人により微妙な違いはあるものの幸せを願う気持ちはおおむね皆同じである。それと同じように

海の緑の色と木々の緑の色とは微妙に違うが、緑という点では全く同じである。伊勢参りの人々の心も同一、海や木々の色も同じ緑と発想した付けである。

海のみどりも樹々の緑も

名オ九 赤蛙あかふかちいさきはがれ畚ふこの葉隠はがれに

随古

季語は「赤蛙」で、春である。「畚」は、フゴと訓み、竹などで編んだ魚などを入れる籠のような物である。「葉隠」は、葉の陰に隠れていることで、「はがくれにちりとゞまれる花のみぞ忍びし人にあふ心ちする」(山家集)と歌にも詠まれている。畚に魚を入れる場合、中に緑の木の葉や竹笹を敷くことがあり、前句の木々の緑から畚を発想した付句である。海に魚を釣りに行くことにし、小さな畚を用意し、海の緑も木々の緑も同じ緑だからと言うわけではなからうが、畚の中に緑の木の葉を敷いた。海で釣った魚を畚に入れたところ葉裏に隠れていたらしく、突然赤蛙が飛び出て来て驚いたという意であろう。海の緑、木々の緑に更に赤蛙と赤の色彩を添えた言葉遊びの趣向表現にも注意しておきたい。

赤蛙あかふかちいさきはがれ畚ふこの葉隠はがれに

名オ十 気強きづよな事をおちまうしあけ畚ふこ申上まへあ

太祇

季語はなく、雑の句である。「気強な事」は、気丈なこと、気を強く持つことの意である。「畚申上」は、ご意見番の役割を担った老い武者の爺が主君に意見を申し上げる意だが、此の句では若君の教育係りの爺であろう。木の葉を敷いて山の幸である茸を入れた畚が、山里から殿の所に届けられて来たのであろう。まだ幼い若君は、

物珍しくその畚を見て駆け寄り、畚の中に手を入れたところ、葉裏に隠れていた赤蛙が突然飛び出し、若君は驚いて泣き出してしまったのであろう。付き添っていた爺は、そんなことに驚くようでは武士とは云えぬと悟り申し上げ、将来殿君としての気構え、気を強く持つことを教育したのである。隠れた所には何が潜んでいるか十分確認をする必要があることも、武士の心得として教えたのであろう。このような場面を今も時代劇などで見ることがある。

気強な事を畚申上

名オ十一 後学こうがくに斯しかした月も見て置はかん

嘯山

季語は「月」で秋、定座の月である。「後学」は、将来のためになる知識や学問の意で、浄瑠璃『曾我五人兄弟』第一には、「これぞ若君のこうがく、教訓の第一と申もの」と見える。前句の「気強な事」を、頼もしくて安心なことの意に解し、幼少の若君のために、歌道の教育に役立てようと氣遣う頼りになる爺の勤めを趣向した付けであろう。城主ほどの武士にとって和歌は、身につけておかねければならない大切な教養である。その日の「月」は、いつも見慣れた満月ではなく、雲の隙間に姿を見せた三日月、珍しい眺めの月であったと思われる。幼い子にとっては満月が月と云うもの、幼い若君には満月以外の欠けた三日月には何の関心もなく、その上眠気に襲われ、部屋に戻ろうとする。爺は、後々の和歌の学問のために若君に和歌の心得を身につけて頂こうと、「気を引き締めて、こういう月こそ見ておきましようぞ」と頼もしき事を申し上げたのである。付句は、爺の発話語的句作りで、「置ん」は、爺の若君教育

の強い意志を窺わせる。

後学に斯した月も見て置ん

名オ十一 着れば着るほど蓑の肌寒

随古

季語は「肌寒」で、秋である。「着れば着るほど」の「ほど」は、何々だけの、その程度のことだった微量な量感を表し、芭蕉の句「しぐるゝや田のあら株の黒むほど」や蕪村の「春雨や小磯の小貝ぬるゝほど」の句に通う用法である。和歌伝統として月は、仲秋の名月、また陰暦九月十三夜の月が詠まれて来たが、付句は、前句の月を冬間近の晩秋の頃のやや冷え冷えとした月、和歌にはあまり詠まれなかった月と見定めた付けであろう。外は仲秋の頃と違い空は冷え初め、月は少しひんやりと冴えて見え、しかもにわか雨が来そうな雲が空に流れる。仲秋の名月とは異なる詩心を誘う月の様子である。こうした月を眺め、後々詩歌を詠む糧にしようと、蓑を着て屋外に出て暫く散策する。晩秋の季節、外は意外に寒く、蓑を着ていると着ているだけの肌寒さが肌身に伝わって来る。即ち付句は、蓑を着れば少しは暖かく、蓑を着ただけの肌寒さは感じられるという意であろう。繊細な情感を捉えた作である。

着れば着るほど蓑の肌寒

名ウ一 僧になりて露のふる里よそながら

太 祇

季語は「露」で、秋である。「露のふる里」は、露深いやや辺境の里の意であり、露は儂い、無常の意を伴う。「よそながら」は、遠く離れていながら、蔭ながら、それとなくなどの意である。前句に僧になって修行の旅に出た人物を見定めた付けである。法躰にな

り墨染の衣に身を包み諸国行脚の旅に出て、故郷を眺められるほどの所に来て、世俗を捨てた身では帰ることは許されない。世俗への未練を断ち切り、故郷の辺りを眺めながら、更に修行の旅を続けるのである。故郷の辺りは秋も深まって来て寒さも加わり露深く、蓑を着ても蓑を通してそれほど肌寒さが伝わって来る。世俗への想いを断ち切る辛さに加えて肌寒さが一層増して感じられることだ。僧になった人物の修行の厳しさ、辛さを詠んだ付句である。

僧になりて露のふる里よそながら

名ウ二 漣ものする太郎兵衛が唄

嘯 山

季語はなく、雑の句である。「漣」をススギと訓み、洗濯を意味する。「太郎兵衛」は、江戸時代駕籠舁などの身分の低い人物の通名であり、前句の僧も以前は同じような身分の人物、或いは同じ仲間であったかもしれない。今は事情あって僧となり、仏道修行の行脚を続けており、故郷を通り掛かって、嘗ては気軽に話を交わした太郎兵衛の妻が洗濯をしている所に偶然出くわす。懐かしさの余り、声を掛けたい気持ちに駆られるが、墨染の衣を纏い修行中の身であり、しかも相手は知り合ひとは言え女性であり、気安く声を掛ける訳にはいかず、たとい親しき中でも俗事に交わることを避け、耐えて故郷を余所目に通り返すというのである。僧となり俗事を断った人物の堅固な心を詠み添える。

漣ものする太郎兵衛が妻

名ウ三 起し出す田のいさかひも元の水

随 古

季語はなく、雑の句である。前句を川沿いで生活する人の一点景

と見て、更に「太郎兵衛の妻」をやや共同生活を乱す人物として想起した付句である。多くの人が川を利用する川沿えの生活は、洗濯をする場所、野菜などを洗う場所などは区別されており、川を大切に利用する。中にはその暗黙の約束を犯す者も出るものである。前句にそうした状況を読み取った付句であろう。付句の「起し出す田」は、田に水を引き田を掘り返し、水田にする田植えの準備作業のことである。水は稲の生育に重要であり、そのため田圃に水を引く時に水争いがしばしば起きる。「田のいさかひも」とは、そのことであり、「も」は前句の太郎兵衛の妻が濺（し）ものする水は争いを起こし、それと同じく田の水争いもまた元はと言えば、皆水が元であるという意である。

起し出す田のいさかひも元の水

名ウ四 あんまり熱い汁を吸かけ

随古

季語はなく、雑の句である。「あんまり熱い」は、度を過ぎてあまりにも熱いの意である。前句の田の水争いから、お上の裁定を仰ぐことになり、そうした人々を泊める公事宿での事柄を付ける。お裁きが思うように進まず、気が立ち、心中穏やかではない。そんな時公事宿で出された膳の汁を吸い掛けたところ、あまりの汁の熱さに一層苛立ってしまう。諍（しやう）いも元はと言えば、水であり、汁もまた元は水、どうも水に恨まれている、水についてないと苛立ちを募らせるばかりである。公事宿は、江戸時代に訴訟のために地方から出て来た訴訟の当事者を宿泊させるための宿のことである。ただし一般の旅人も宿泊させ、江戸と大坂ではかなり異なっていたらしく、

『守貞漫稿四』には「江戸の旅人宿は公事宿と号け、官府に用ある者を泊るを旨とする也、此故に京坂の如く美制の宿無之、旅泊は甚だ劣れり」とある。

あんまり熱い汁を吸かけ

名ウ五 献る花の宰領請取て

嘯山

季語は「花」で春、定座の花である。「献る」は、タテマツると訓む。「宰領」は、荷物の運送に際し、指揮・監督に当たる人のことで、この句では花を運んで行く人を監督する役人を言う。「請取て」は、お上に献上する季節の花を運ぶ人たちの警護の役を承ったの意である。お伽草子『ささやき竹』には、「男一人とさいりやうの侍に、かやうのめでたき事あらじとて、酒を数々すゝめければ」と見え、当句の付合もほぼ同じような場面であろう。宰領の拝命は大変名誉な事で出発に際し、お祝の宴が催され、前句はその祝いの席での出来事である。付句は、その席に出された膳の汁のあまりの熱さに一瞬戸惑い、宰相という大役拝命の緊張も加わって慌ててしまったの意である。嘯山の句には、このような古典めかした作品がしばしば見られる。

献る花の宰領請取て

挙句 柳を紐にむすべ藤笠

随古

季語は「柳」で、春である。柳の細い枝を紐として用いよの意である。柳は古来より豊作や繁栄、健康や長寿と様々な願いを叶える神聖で縁起のよい木として深い信仰を集めて来た。また、万葉集巻十には「ますらおが伏し居嘆きて造りたるしだり柳の纏せ吾妹」と

いう歌があり、柳を髪飾りに用いたことが知られる。男子も遊宴や神事の折り冠に柳を用いて花を飾り付けている。「藤笠」は、『守貞漫稿』に「藤ヲ編デ造ル。」とあるように、藤の蔓で作った笠である。付句は、花を献上するという大切な役を仰せつかったのだから、藤の蔓で出来た笠を頭に頂き、古来より神聖なものとして扱われてきた柳の枝できちんと頭に結びなさいよの意である。華やいだ姿ではなく、神聖な気持ちで旅の道中を精霊に守られる意味も込められていたかもしれない。柳という植物は、そういう神秘的なものであった。藤笠を出したのは、花尽くしの表現の試み、即ち挙句振りの趣向である。

〔付記〕

木村三四吾先生を囲んで勉強会を始めたのは、二十数年前のことである。初めは大橋正叔先生（元大阪樟蔭女子大学教授）と三人であったが、その後数名に増え、会は先生が亡くなられる二か月前まで続いた。その間俳諧初期の『竹馬狂吟集』から貞門・談林・蕉風・蕪村等各時代の連句作品を読み進め、連句解説の法について先生に多くのことを学ぶ事が出来た。右の連句評釈は、先生に学び得たことに基づき、西いおりさんの協力を得て試みた稿である。拙い評釈であるが、先生のご霊前に捧げ、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

